

武道の「道」と英語のwayについて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2021-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石黒, 太郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/22055

武道の「道」と英語の way について

石 黒 太 郎

はじめに

本稿は2021年3月27日、Zoomを使って開催したフォーラム「『武道』の英訳“martial ways”をめぐる対話」(長尾進[明治大学国際日本学部教授]主催)にて話をした内容に加筆したものである。外国語の語を自国語に取り入れる、いわば外来語を取り入れる現象を言語学では借用、借入という。「武道」という日本語の語を英語に翻訳して借用する際に、英語の way を用いるのが適切かどうかを考察するため、この way がもつ意味、そしてそれが使われた場合に醸し出さうる意味合いについて、日本語と英語の間における借用の現象として、この way の問題を考察する。

OED における「武道」

まず英語に借用された「武道」“budo”について確認しておく。OED Online, “budo, n.” は2004年12月に新たに追加された語彙項目で、ヘボンの辞典を除くと英語文献での初出例は1905年となっている。語源の解説を見ると bu と dō に分けられること、dō は “way, spiritual discipline” の意味であることが示されている。

Etymology: < Japanese *budō* system of fighting skills(c1220 as *butau* , *budau*), warrior ethos(late 14th cent. in same sense as

bushido *n.*; 1603 as *butō* in *Vocabulario da Lingoa de Iapam*), martial arts collectively < *bu-* military (< Middle Chinese: see martial art *n.*) + *dō* way, spiritual discipline (< the Middle Chinese base of Chinese *dào tao n.*; compare judo *n.*). Compare earlier bushido *n.* and the following:

1867 J. C. Hepburn *Japanese-Eng. Dict.* (at cited word) *Bu-dō* (*Samurai no michi*), Military sciences.

そして budo という英語の語義は “Martial Arts” とした上で、Martial Arts をさらに説明した文章が続く。

The ethos underlying the study and practice of Japanese martial arts; the spiritual development central to and resulting from (training in) these arts; the traditional code on which they are based. Hence (with *singular* or *plural* agreement): Japanese martial arts collectively. Cf. bushido *n.*

おなじく OED の第 3 版で独立した語彙項目となった現在の *OED Online*, “martial art, *n.*” で語源の解説を見ると、このように日本語の「武道」ではなく「武芸」「武術」を翻訳した句となっている。「道」という日本語はこの翻訳の前提にない。

Etymology: < martial *adj.* + art *n.*¹, after either Japanese *bu-gei* (8th cent.; 1603 as *buguey* in *Vocabulario da Lingoa de Iapam*; < *bu-* military affairs + *gei* art, craft, accomplishment) or Japanese *bu-jutsu* (1741 or earlier) < *bu-* + *jutsu* art, technique, skill, craft: compare ju-jitsu *n.*

The elements forming the Japanese compounds *bu-gei* and *bu-jutsu* are all < Middle Chinese; the compounds are < the Middle Chinese forms of Chinese *wǔyì* skill in martial arts and Chinese *wǔshù* wushu *n.* respectively.

martial art というフレーズは、OED 第2版 (1989) ではまだ独立した語彙項目にはなっておらず、“martial, a. and n.” の成句の一つとして紹介されていた。

1b. Of sports, exercises, etc.; Serving as training for warfare. **martial art** (usu. *pl.*), any of various fighting sports or skills mainly of Japanese origin, such as judo, karate, and kendo.

第2版では fighting sports or skills とだけ記されているものが、第3版では精神的な訓練ならびに心身の統一を強調するという記述が加わっている。martial arts という英語の成句においても、第2版から現在に至るまでのあいだに「武道」に対する認識が深まっていることがここに読み取れる。

「道」「みち」

次に日本語の「武道」という語における「どう、みち」について考えてみると、「武道」の「道」は単なる「とおりみち」「道路」ということではなく「道を外れる、道を誤る」という比喩的表現で用いられるときの「道」に近いものであろう。「決まり」「ことわり」「教え」というような字義として捉えたものと私は理解している。

ではこのような字義の「道」の翻訳としてどの英語が適切なのであろうか。『新和英大辞典』第5版、「みち [道・途]」の項の中には次のような翻訳が示されている。関連する定義のみを抜粋する。

2. [経路] a route; (目的地までの) the way
6. [前途] future; [進路] the path ahead
7. [分野] (職業) a vocation; a chosen career; (技術) a skill;
[特殊な領域] a specialty; a special field
その道の達人 a master of the art/profession; an expert in this field
道を究める go as far as one can in one's field
8. [倫理的な・宗教上のきまり] a way
人の道 humanity; ... the right path

ここにある way や path のほかにも、「道 (みち)」に相当する英語として、たとえば road, track, course など挙げられるであろう。ではなぜ、road, track, course は少なくとも「武道」の「道」の訳語として選ばれないのか。その要因として、それぞれ語の語源があると私は考えている。

『英語語源辞典』によると way の語源はインドヨーロッパ祖語の語根 **wegh-* に遡ることができ、移動すること、車両でものを運ぶことを意味する。ラテン語の *uehere*, *uia* と同根である。同じ語根から英語に残る語としてほかに *weigh*, *wain*, *wagon* などがある。古英語の時代から「人の歩く道、人が重荷を苦勞して運ぶ道」として一般語であり続けた。

road は『英語語源辞典』の “*way*” にあるように、19世紀になって一般的な「道」を表す語として *way* に取って代わった語である。だがもともとは *ride* の名詞形であり、馬に乗っていく旅という意味の語であった。*raid* という名詞も同じように、語幹の母音を変えて作る派生語で、こちらは馬に乗っていく軍事的な旅、遠征をもともと表す語である。現在のように *road* が「道」を表す初出の例は16世紀になってからのようである (『英語語源辞典』 “*road*”)。徒歩に比べれば高速に移動ができる乗馬による旅は武道の「道」にはそぐわないものであろう。

path も way とおなじく本来語で「(踏まれてできた) 道、小道」「(人として歩むべき) 道、方針」を示す。

track は『英語語源辞典』によると、中世のフランス語が語源とも、中世のオランダ語が語源ともいわれているものの、詳しい語源のわかっていない語である。ただ、英語のなかでの意味の発展においては、フランス語起源の trace と関係が見られるとある。人だけでなく、車や獣の通った跡をたどる、後をつけるというのは「武道」の「道」の翻訳として適切ではない。

course は、英語の current とも同語源のラテン語の「走る」を意味する動詞 currere の名詞形 cursus に由来する。「走る」という速度感からも武道の「道」にはふさわしい訳語にはなりえないであろう。

このように、「武道」の「道」に近い「みち」の訳語として、上に引用した『新和英大辞典』が way と path を選択しているのは、語源の観点からも適当な判断である。

way の比喩的用法

『英語語源辞典』にある way の比喩的用法が、「武道」の「道」の訳語として way の適否を考察する上で極めて重要であると私は考える：「比喩的用法の多くには *L via*、あるいはその発達である *F voie* の影響も考えられる」(“way¹)”。なかでも次に抜粋する OED の 2 つの定義は重要である。魂の救済を得る手段としてのイエス・キリストを呼ぶ名として、そしてキリスト教という宗教を指す言い方として way を用いるものである (OED Online, “way, n.1 and int.1”)。

3b. As an appellation of Jesus: the means of attaining salvation.

16d.(b) Sometimes *spec. in the Way*: (a name for) the Christian religion.

キリスト教の用語としては日本語でも「道」を使う。『岩波キリスト教辞典』
「道」には次のような解説が記されている。

旧約、新約を問わず聖書の中で道が象徴しているのは人間の生き方、行為、生活態度、ひいては人生そのものである。〈善い〉道、〈正しい〉道とは神の教えにかなった道、神と永遠の命とにいたる道であるとされる。

OED Online, “way, n.1 and int.1” の2つの語義のもとになっているのは、それぞれ「ヨハネによる福音書」14:6と「使徒言行録」9:1-2の文言である。日本語訳は最新の『聖書協会共同訳』、ギリシア語原典と中世の西ヨーロッパで広く用いられていたヒエロニムスによるウルガータ訳はそれぞれドイツ聖書協会の刊本から引用する。英訳としては代表的な2つを引用する。1611年のJames 1世の命令によって製作された欽定訳聖書 the Authorized Version、そして現代の専門家が用いる代表的な刊本である the New Revised Standard Version を引用する。

ヨハネによる福音書 14:6

イエスは言われた。「私は道であり、真理であり、命である。私を通らなければ、誰も父のもとに行くことができない。…」(『聖書協会共同訳』[新] 192)

Greek: ἐγώ εἰμι ἡ ὁδὸς καὶ ἡ ἀλήθεια καὶ ἡ ζωὴ (Nestle and Nestle 297)

Vulgate: ego sum via et veritas et vita (Weber 1685)

King James Version: I am the Way, the Truth, and the Life
(*Holy Bible*)

New Revised Standard Version: I am the way, and the truth,

and the life (Metzger and Murphy [NT] 148)

使徒言行録 9:1-2

さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅迫し、殺害しようと意気込んで、大祭司のところへ行き、ダマスコの諸会堂宛ての手紙を求めた。それは、この道に従う者を見つけ出したら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するためであった。(『聖書協会共同訳』[新] 225)

Greek: ὅπως εἰάν τις εὕρη τῆς ὁδοῦ ὄντας . . . (Nestle and Nestle 345)

Vulgate: ut si quos invenisset huius viae . . . (Weber 1712)

King James Version: that if hee found any of this way . . . (*Holy Bible*)

New Revised Standard Version: so that if he found any who belonged to the Way . . . (Metzger and Murphy [NT] 173)

新約聖書のこの ἡ ὁδός の翻訳としてラテン語ではすでに *via* が定着し、それと同語源の *way* が英語では定着していることが見て取れる。「ヨハネによる福音書」の古英語への翻訳にも *way* が用いられている：“ic eom weg and soðfæstnys and lif” (Liuzza 188)。*way* はキリスト教の信仰の「道」を表わす語として、1000年以上も使われ続けており、日本語の「道」の比喩的用法とも合致する素地はありとみてよいであろう。

翻訳借用

外国語の語句を自国語の語句として取り入れることを借用 *borrowing* と言う。外国語の語句が表す概念を自国語の語彙で表すことができずにそのまま借用することもあるが、借用する語に相当する語が自国語にすでにある

のに借用する場合もある。先ほど見た「道路」に相当する語の中でも track, course は英語としては借用語 borrowings/loans になる。その一方で、「外国語の語結合を直訳した形で借入すること」を翻訳借用 loan translation / calque という (『英語学要語辞典』“calque”)。

この観点から budo, bushido, martial arts、そして今回のフォーラムで取り上げられている martial ways というものは次のように分類できる。

借用 borrowing/loan: *budo, bushido*

翻訳借用 loan translation / calque: *martial arts, martial ways*

日本語の「武道」の綴りと発音を英語のものに適応させた *budo* は借用語であるのに対し、「武道」の構成要素を英語にもともとある語の組み合わせで翻訳し、成句として新しい意味をもたせた翻訳借用が *martial arts* となる。同じように作られたのが *martial ways* と分析することができる。*martial ways* は OED で独立した語彙項目となっていることから、英語の中ですでに定着した翻訳借用となっているとみなすことができる。

では *martial arts* と同じように *martial ways* という翻訳借用も英語の中で定着することになるのであろうか。言語の変化において今後何が起きるかを予想するのは極めて難しい。ただ、ひとつ参考になる翻訳借用の例がある。*OED Online* の *face* の項目を見ると、このような語義が載っている (*OED Online*, “face, n.”)。

17. Reputation, credit; honour, good name. Frequently in *to lose face* at Phrases 8h(a), *to save face* at Phrases 8h(b).

Originally used by the English trading community in China.

[Partly after Chinese *liǎn* face, moral character, and partly after *miànzi* face, social prestige . . .]

[Phrases 8]h. (a) **to lose face**: to be humiliated, to lose one's credit, good name, or reputation; (hence) **loss of face**: humiliation. (b) **to save face**: to avoid being disgraced or humiliated; similarly **to save (one's own, another's) face**.

[In *to lose face* after Chinese *diū liǎn* and *diū miànzi* (compare *diū* to lose). With *to save face* compare Chinese *liú diǎn miànzi* to leave face for someone, to not completely disgrace someone, also *bǎoquán miànzi*, *liú miànzi* to preserve face (in dictionaries) . . .]

これはもともと 19 世紀の中国にいた英語を母語とする貿易関係者が使っていた face の意味で、おそらく先に成句である lose face、つまり「面目を失う」「面子がつぶれる」にあたる中国語を翻訳借用した英語であろう。この意味での face は 20 世紀にはすでに定着していて、成句の用例を見ると、Evelyn Waugh の有名な小説でも使われている。2004 年の *New York Times Magazine* にも用例があることから、英語の中でこの翻訳借用が廃れることなく使われていることがわかる。ちなみに、この face という語は、言語学の一分野である語用論の古典的研究、Brown と Levinson の共著でもメンツを表す用語として使われ、それが日本語の語用論ではカタカナで「フェイス」として、ある意味逆輸入された状態になっているという面白い現象が見られる。つまり、成句として翻訳借用された「面子を失う」という中国語の成句が英語で定着し、それによって成句の一部でしかなかった face という英語の単語にまで新たな意味をもたらしているわけである。それほどこの save face / lose face という翻訳借用の定着度合いは強いということになる。

結論

「武芸」「武術」の翻訳借用として生まれた経緯はあるにせよ、英語の martial arts も十分に英語に定着した成句である。ただ、「芸」「技術」という、自然とは対立概念となる人間の営みを表すラテン語起源の arts がもつ意味合いによって、日本の「武道」がもつ精神修養、心身統一といった意味合いを知らない人に martial arts という言葉をいってもその部分は伝わらないのではないか。そこで「道」を翻訳借用した英語の成句を新たに考え、その部分の意味を伝えたいということで生まれたのが martial ways なのであろう。その観点から行けば、「道(みち)」に相当する英語の単語として way が一番ふさわしい語であることは確かである。すでに way という語にはキリスト教の伝統の中で新約聖書のギリシア語原典で使われていた ἡ ὁδός の翻訳借用として定着しているので、精神や信心・信仰といった要素を含んだ「みち」を表すにはその伝統を利用することができる。ただし、そういった意味合いをすでに持っているがゆえにすでに無色の語ではない。キリスト教の信仰と結びついているがために「神」といったものを連想させるものになってしまう。それが妥当なのかどうかは、武道の専門家諸氏の判断に委ねたい。

また、一神教のキリスト教の伝統で使われてきた言葉なので、この意味で使う際には複数形はない。複数形からこういった精神や心に結び付く意味に連想が及ぶのは容易ではないであろう。その点、martial arts の arts は都合のよい言葉で、art ではなく arts という複数形であればこそ、liberal arts との連想が生まれ、人間が鍛錬して身につけるもの、鍛錬にあたる西洋の伝統的な比喩を用いれば耕すことで培っていく文化 culture, cultivation と同じ範疇にあるものというように理解される。

したがって、martial ways という成句の way/ways が日本語の「みち」という概念を表していることを、一般の英語の話者が理解してくれるようになるには、martial arts かそれ以上、たとえばメンツを表す face のように、

martial ways という成句が英語圏で十分に浸透しなければならない。それは結局、どれだけ英語圏で日本の「武道」が理解されるかということにかかっているのであろう。

Works Cited

- Brown, P., and S. Levinson. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge UP, 1987.
- The Holy Bible, an Exact Reprint of the Authorized Version, Published in the Year 1611*. n. pag. OUP, 1985.
- Liuzza, R. M., editor. *The Old English Version of the Gospels*, vol. 1, Text and Introduction. Early English Text Society / OUP, 1994.
- Metzger, Bruce M., and Roland E. Murphy, editors. *The New Oxford Annotated Bible*. OUP, 1989.
- Nestle, Eberhard, and Erwin Nestle, editors. *Nouum testamentum graece*. 27th ed., revised by Barbara and Kurt Aland, Deutsche Bibelgesellschaft, 1993.
- OED Online*. OUP, 2020. Accessed 26 Feb. 2021.
- Oxford English Dictionary*. 2nd ed., OUP, 1989.
- Weber, Robert, editor. *Biblia sacra iuxta uulgatam uersionem*. 5th ed., edited by Roger Gryson, Deutsche Bibelgesellschaft, 2007.
- 【岩波キリスト教辞典】大貫隆ほか編、岩波書店、2002。
- 【英語学要語辞典】寺澤芳雄編、研究社、2002。
- 【英語語源辞典】寺澤芳雄編、研究社、1997。
- 【新和英大辞典】第5版、渡邊敏郎ほか編、研究社、2003。
- 【聖書 聖書協会共同訳 旧約聖書統編付き】日本聖書協会、2019。

(いしぐろ・たろう 商学部教授)